
亡霊と不死者の時間

すたりむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡霊と不死者の時間

【Nコード】

N4244BA

【作者名】

すたりむ

【あらすじ】

十九歳になったばかりのある日、高杉綾子は死んだ。そのはずだった。殺されたはずなのになぜか生きていた彼女は、それをきっかけとして横浜全体を揺るがしかねない事件へと巻き込まれていく。揺れ動く状況の中、彼女は果たして自分の生をどう定めて行くのだろうか？

序

十九歳になつたばかりのある日、高杉綾子たかすぎあやこは死んだ。

完璧な不意打ちだった。

どのくらい完璧かつて、なにしろ殺された彼女自身が相手の顔を確認することもできなかったのだ。

うしろから重加速した精霊刀で左胸を一刺しし、そのまま肩のほうに強引に引つ張つて抜き去り、返す刀で胴をまっふたつ。

まさに一瞬。振り向く隙すら与えない、完璧な暗殺術だった。

……あえて論評すれば、二刀目はちよつとオーバーキルだったんじゃないかな。と思わなくもないけど。まあ相手はバケモノだし、しょうがないよね。死んでなかったら怖いもんね。

そついうわけで、高杉綾子は死んだ。これは文句ない事実。

さて、ここで問題がひとつ。

じゃあ、このわたしは。

高杉綾子の記憶と、高杉綾子の姿形を持ち、高杉綾子のココロを引きずっているこのわたしは、いったいなんなんだろうね？

1、問題提起

1 . the question .

「なに、これ」

がつん、がつん。

頭が割れるように痛い。

二日酔い　と考えて、すぐに首を振る。横浜の酒はすごく高い。

……頭、打ったっけ。

考える。視界が歪んでキモチワルイ。

そういえば、昨日は派手に倒れたんだっけ。

まあ、無理のない話。

胴体が上下泣き別れになって、上半身は頭から血だまりに落ちた。

なら、あたまがいたくないわけがない。

(え?)

がつん、がつん。

頭が痛い。

脈拍に合わせて、ハンマーに殴られたような衝撃が走る。

……困った話だ。

心臓なんてとっくに突き破られたのに、なんで血が通うんだろう。

「ちよつと、待て」

それは、おかしい。

だって、そんな傷なんて、どこにも

転がってあおむけになり、目を見開く。

空が、見えた。

青い空。

雲も銀色の円盤もない、澄み渡った紺碧。

ああ。横浜の空だ。

(じゃあ、べつにあの世ってわけでもなさそうね)
ゆっくりと手をにぎり、開く。異常なし。

腕を上げ、おろす。異常なし。

膝を立て、おろす。異常なし。

最後に、よいしょっと上半身を起こしてみる。

……異常、なし。

(えーと……夢?)

ぼーっと靄がかかった頭で考えつつ、ふと服を見る。

「あ

破れ、千切れた上着。

左胸から肩にかけてと、胴回り一帯がボロボロに裂けていて、ひどいことになっている。

……そう。ちょうどわたしの記憶にある通りの裂けかただ。

けれども、周囲には血の跡もない。肉体に傷もない。

まるで手品みたいだ。ほら、あの箱に入れたきれいな女の子を輪切りにするやつ。そういえば、なんであれ切れないんだろうなあ。

刃がこんなにやくできてるとか。まさかね。

ずきん、ずきん。

……頭、痛い。

馬鹿なことを考えている余裕もなく、とりあえず起きあがってみる。

いつもの、帰り道の途中にある路地裏。

そう。

アパートに帰る途中で殺されたんだから、つじつまは合っている。合っていないのは、ただひとつの事実。

「なんでわたし、まだ生きてるんだろう？」

かちゃん、と鍵を開けてアパートの自室に入ったわたしは、真っ

先に服を脱いでバスルームに転がり込んだ。

姿見で自分の形を確認する。見たところ、特に変なところはない。顔色は悪い。けど、それ以外の異常は特になし。乱暴された跡も外傷もない。

(幻覚の類？ なら)

「偽也！」
ダウト

「ばし、と周囲の空間に衝撃が走り それだけ。

ゆらぎのひとつもない。幻術の類は気にしなくてよさそうだった。そうすると、

「……あ」

くらり、と目眩がして、その場にへたり込んだ。

がつつん、がつつん、と、心臓のリズムに合わせて鈍痛が走る。あたま、いたい。

「ま、いいや。生きてるのは事実だし」
思考を放棄。

立つとまた倒れそうだったので、這いながらバスルームを出る。居間の時計を見ると、長針と短針が11の近くで重なっていた。

(うわ、大遅刻だ)

舌打ちする。いままでこういう失態はなかったんだけど。

ともかく、いまの体調じゃ外に出るのもおぼつかない。動かぬ身体をなんとかして薬棚まで持って行って、常備している薬を取り出すと、水なしでそのまま飲み込んだ。

「……にが」

舌にいやな味が残ったけど、無視。

今度は洋服棚のほうへ移動。途中、だんだん這うのがわずらわしくなあって、わたしは立ち上がった。

(うん。なんとか、立てるみたい)

まだ痛む頭に顔をしかめつつ、テキストにばいばいと服を出して着替える。

それから疲れを隠せる程度に化粧を済ませて、玄関へ。

途中、ふと気になってバスルームに寄る。

姿見のなかの自分は、べつに、いつもの自分だ。

(へんなの)

自分自身でもなにが気になったのかわからないまま、わたしは家を出た。

突然だが、横浜の街並みはけっこうクレイジーだ。

まず規模が違う。

《崩壊》以降、東京圏の街は『砦』^{フォート}と呼ばれる生活単位で暮らさなければいけなくなった。

もちろん、砦^{フォート}なしで暮らせないわけではないのだが、砦^{フォート}は防衛結界で周辺の脅威から守ってくれるし、魔力を制御して魔力嵐などの災害を防いでくれる。なにより、生活に必要な魔力を手に入れやすいため、その内部に自然と人が集まる、というわけだ。

で、街の直径に比して収容人口はおおむね二乗の速度で上昇していくのだが、砦^{フォート}を維持するためのコストは三乗に比例した速度で増加していく。自然、大きくできる規模には限界があるわけで、現状では小田原以东のほとんどの街の人口が10万から20万程度しか許容できなくなってしまうている。

ところが横浜の場合、関帝結界という強力な魔術現象に守られているせいで、砦^{フォート}を作る必要がない。元々が大きい街だったこともあり、人口は未だに200万を超えていたりするのだった。単純な人口密度で言えば、これは東京圏でぶっちぎりの最大である。

次にこの、いまわたしが乗っている路面電車。これも《崩壊》以後のことだが、山手大結界との共振を恐れて各地で「電車の線路」という概念はほとんどなくなった。だが横浜は地勢上その手の干渉が少ないため、このような構造物も許容される。環状線は法律で禁止されていたりするんだけど。それは当然か。

他にも、戦乱に巻き込まれなかったせいで大量に残っている高い

構造物とか。これはまあ、魔力嵐や遮光円盤エクランプスが発生しにくい土壌の影響もあるけれど。特に過去の象徴たる横浜ランドマークタワーの偉容は、《崩壊》後生まれの若者たちにかつての東京タワーを見るような畏敬と羨望を抱かせる。……はず。ごめん、わたしも若いからこのあたりはテキスト言ってるかも。

「ま、そんなのよりなにより、さらに見た目に重大な差があったりするんだけど」

つぶやきながら、路電から降りる。

目的地は、目の前にあるご立派なビル。……ではなくて、その脇にあるしょぼい四階建ての事務所だ。

昔の神奈川県庁の本庁舎のそばに立てられたこの貧相な緑色の建物こそが、我らが《新生の道》の横浜支部だったりする。

かつては、第二分庁舎とやらがあった場所。アクシデントで崩れ落ちたその場所を横浜首長部が《新生の道》に譲ってくれた、という話だった。完璧な一等地であり、横浜市の《新生の道》への好意の証という話だったが

(どう考えても悪意込もってるわよねー、これ)
ため息。

うちの精一杯の技術を動員して立てたという話だが、やっぱり《崩壊》前の建物とは比べものにもならないのであった。横の立派な建物と比較するとダメなところが目立つ目立つ。地震が来たら真っ先に崩れるんじゃないのかこの事務所。

「ま、仕方ないよね。しょせん横浜支部なんて左遷先だし……」

聞かれたらわりとまずそうなことをつぶやきながら、ドアを開けていきなりひつつかまれて中にひきずりこまれた。

「なんだい。あんたかね」

男 保安課の、たしか榎崎かえいさきとかいう男 は、こっちの顔を見て安心したように手を離れた。

思わずへたり込む。

「お、どうした？」

「勘弁してよー……ただでさえ頭イタイのに、いきなり揺らさないで……」

視界がクラクラして吐きそう。ああ、朝食食べてなくてよかった。

「悪いね。こっちも仕事でな」

「ええ、とても悪いわ。」

どうしたのよ、いきなり。なに、だれかこの入り口で狙撃でもされた？」

「遠くはねえな。どうも昨日のうちに人死にが出たらしい」

ぴくん。眉が跳ね上がる。

「人死に？」

「ああ」

「誰が」

「聞いてねえ。まあ、ともかく警戒しとけっつー話だった」
首をひねる。

……ていうことは、公開情報になってないんだ。

「いつものデマとは違うの？ ほら、《北》の暗殺者がわたしたちを狙っているっていうやつ」

「んー、俺もそう思ったんだけどな。偉いひとたちが信じてるっばいんだよな」

「……それは、支部長が信じているってこと？」

「うちの上司もさ」

横の、保安課の事務室を指して言う。

なにかが、妙だ。

「ねえ。ところで昨日、わたしも殺されかかったんだけど」

言つと、榎崎は目を丸くした。

「マジか」

「そこまで悪趣味な冗談言わないわよ。ま、運よく生き延びたけど」

……本当に。どうやって助かったのかわからない以上、運がよかつたとしても言いようがない。

「で、その相手はいつたいどんな……？」

「それが、わたしにもよくわからないんだけれど」

「榎崎さんっ」

どたどたと階段を降りてくる音。この声は、たしか同じ課の……

「おう、谷津田やつたさんか。出かけるのかい？」

「うん。支部長に頼まれて、殺された、」
「」
びた。

拳動が止まる。

その視線が、わたしに向いていた。

「？」

図らずも見つめ合うふたり。

……えーと。お見合い？

とりあえずウインクひとつ。やっほー。みたいな。

途端。

「う、うわあああああああああああああー!？」

どたどたどた。階段が上がっていく。

「い、生きてる生きてる生きてるうううううううううううー!？」

「……………失礼ねー。まったく」

年頃の娘がウインクしてるのにその反応はないだろう。と思う。

たとえ趣味に合わなくても愛想笑いくらい返せ、ばか。

「気分を害したわ。帰ろうかしら」

「まあ待てや。いちおう外は危険っつーことだし　それに、ひとつ

つ重大な謎が解けただろ？」

「謎、というと？」

「殺されたのは誰か、っつー話さ。

あの反応からして、殺されたのは高杉さん、あんたっつのが妥当だろ？」

「わたし……?」

「そうさ。ま、実際はデマだったわけだがね」

榎崎の言葉をよそに、わたしは考え込む。

そう。わたしは殺された。昨日の晩、たしかにあの場所で。

でもわたしは生きている。これは謎だ。

「謎だとすると……」

「あん？」

「どうも、一筋縄ではいかなそうな謎みたいね、この事件」

「高杉さん！」

支部長室に入ると、そのおじさんは駆け寄ってきてこちらの手を取り、ぶんぶん振り回した。

「無事だったのね、よかった！ ああもう、殺されたって聞いたときにはどうしようかと思ったのよ？」

「……ど、どうも」

気圧されつつ答える。

この、やたらテンションの高いおじさんは花小路貞夫はなのこうじきだおという。まだ40台の半ばだが、その年で横浜支部の長を勤めているのだから、そうとうなやり手だ。

……オカマだけど。あとこの常時オーバーハイテンションはどうにかしてほしい。こっちは低血圧に加えて頭痛持ちだったのに。

と、ふと彼はこちらの顔をのぞき込んで心配そうにたずねた。

「顔色悪いわね。大丈夫？」

「ちよつと頭痛です。どうってことありません」

「そう？ 無理せず一日くらい休んでもいいのよ？」

「大丈夫です。それに今日は出てきてよかった。死んだことになっていたんでしょう？」

「ええ。まあそれはそうだけど……
ごめんなさいね。変な情報を鵜呑みにしてしまったのは私の責任
だわ」

「……そう来たか。」

そう下手に出られると、こっちなかなか追求しづらいのだった。
「それは構いませんけど、どこからの情報だったんですか、それ？
いままでこんなことなかったのに」

一応食い下がってみる。
相手はちよつと考えて、

「んー、どうしようかしら。本来なら言うべきではないんだけど
……」

「政治的な話ですか？」

ちよつときな臭さを感じつつ、たずねる。

「そうね。政治的と言えば政治的。……聞きたい？」

「聞かせていただけるなら、喜んで」

「わかった。じつはね、司令部から通達があったのよ」

「司令部 横須賀から？」

「ええ。今日、情報課に配属される人物は《北》の間諜の疑いあり、
とね」

「新人……？」

「聞いてないの？ 椎堂さんには言っておいたはずなのだけど」

「ああ いえ。わたしが聞き漏らしていたのかもしれない」

慌ててフォロー。というか今度なにかおこれ卿のばか。思わず地
雷踏みそうになったじゃないか？

「新人が配属される時期でもないし、わたしとしても警戒してはい
ただけね。」

で、そこに殺人事件の報告でしょ？ また間の悪いことに、前日
に当人が予定時刻を大幅に遅刻して到着したっていう事実があつて
ね。てつきり彼の仕業かと思つてしまつたわけ」

「その当人はいま、どこに？」

「保安課が尋問しているところよ。」

まあ、殺されたのがデマである以上、すぐ釈放されると思うわ
尋問と書いてゴーマンと読む。……いや、想像だけど。

保安課にくびり殺される前に冤罪を晴らすことができたのなら、
そいつは運がよかったということなんだろう。たぶん。

「まあ、事情はだいたいわかりました。それじゃ失礼します」

「ええ。それとわかつているだろうけど、この話は」

「はい、だれにもしやべりません」

(ていうか、《北》となんてだれだって関わりたくないだろうしね)
心のなかで付け加えて、わたしは部屋をでた。

わたしの所属する情報課というのは、スパイの元締めみたいなの
ころだ。

下っ端が横浜の各地から得たデータを整理・統合し、意味のある
情報に変えて厚木に送る。場合によってはその情報を元に得られる
利益を巡って横浜首長部や《北》と対決する　そういう場所。

(まあ、首長部に懐柔されきっているうちや《北》に、対決する余
地がある気もしないけど)

さつき会った支部長の顔を思い出しつつ、独白。きっといっぱい
賄賂もらえるんだろうな。いいなあ。

心にもないことを考えながら歩いていると、見知った顔に出くわ
した。

「谷津田が妙なことを口走りながら走っていったのもしやと思っ
たが　やはり生きていたか」

「ごきげんよう、卿。オフィスの近くで会うのは珍しいわね」

「まあな。」

だれかさんが死んだとか生きてるとかうるさいので、火事場でも
見物しようとしてきたが、飽きたんで戻るところさ」

彼女、椎堂卿は、そう言って笑った。

この見るからにやる気のないちびすけは、じつはわたしの上司、情報課長である。

……のだが、オフィスで見かけたことがほとんどない。いつも理財課のほうに入り浸っていて、職員の間でも情報課ではなくて理財課の人間と見なされている風情すらある、超問題児なのだった。

「で、どうなんだ。実際」

「なにが」

「襲われたってのはデマなのか。一片の真実を含むのか。場合によっては報告書を書かねばならん」

「……報告書ー？」

「なんだよ、その顔は」

「いや、想像できなくて。」

「ていうかやめてよね。卿がそんなもの出したら槍が降るわ」

「ははは。殴っていいか小娘」

「謹んで遠慮します。」

ま、襲われたわよ。なぜか無事だったけどさ」

「襲った相手は強かったか？ それから相手の目的はなんだと思う。単なる脅しか、それとも本気で殺しにかかってきたか。外見は見たか」

「順に答えると、強かった。目的は殺すことだった……のかな。よくわからない。背後から不意打ちされたから相手は視界に入っていないわ」

正直に告げる。不意に襲われ、なんだかわからないうちに気を失ったこと。目が覚めたら自分は倒れていて相手はいなかったこと。

「……それだけだと確かにわからんな。」

物を取られた形跡とか、着衣の乱れは？」

「ない。ああ、着衣のほうは一部破けていたけど、それは攻撃で破けたとはつきりわかるものだった」

「とすると強盗や変質者の類という可能性もなしか。」

しかし 高杉が不意を討たれるほどの相手か。とんでもないな」

「ちょっと。あんまり過大評価しないでよね。」

リタイアして長いし、もう以前の勘はないわよ」

「ま、素人ではないということだ。」

脅迫であれば姿を晒さない意味はあまりないが、殺しに来たに
しては君は生きている。不思議だな」

椎堂は首をかしげ、

「わからないことは多いが、ひとつだけわかったことがある」

「え、なにが？」

「つまりだ。事情はよくわからないが、まだ報告書を書くほど情報は集まってきたくないのだ」

「はあ」

「というわけで帰る。うむ、無駄足だったな」

言いたい放題言っ、彼女はオフィス 理財課の に帰って
いってしまった。

(……やっぱりやる気ないじゃん)

つぶやく。まあ、槍に降られても困るけど。

情報課のオフィスの扉を開けようとして、そこから飛び出してきた人影とぶつかりそうになった。

「あ、すみませ」

びた。止まる。

男も、思わず止まっていた。

「おまえ、生きてたのか」

……むか。

「ごきげんよう、佐伯^{さえき}。わたしが無事で残念だったわね」
嫌味に言ってる。

相手は一瞬眉を跳ね上げたが、すぐ嫌味な笑みを浮かべた。

「そうか。さすがに高杉相手じゃ殺人鬼もまたいで通るか。信じた俺がつかつだったな」

「珍しく謙虚ね。自らの無能に気付けるなんてサル並みの知性だわ」

「ゴキブリ並みの生命力を持つやつに言われると格別だな」

「ケンカ、売ってる？」

「先に吹っかけたのはテメエだろ」

「ばちばちばち。ふたりの視線が火花を散らす。」

「険悪な雰囲気、おもわず周囲のみんなも固まって、」

「あ、綾ちゃん！」

「……いなかった。しまった。」

「無事だったんだね、よかったよお！」

「あー……うん。おはよ、チカ」

「氣勢を削がれ、言う。」

「佐伯もどうもやる気をなくしたらしく、」

「……ふん」

「とかなんとか言っただけで去って もとい、逃げていった。」

「ホント、びつくりしたよお！ 朝来たら綾ちゃんがいなくて誰か

「死んだって言うんだもん。でも間違いだって信じてた！」

「ま、まあね」

「気圧される。オフィスのみんなもなんとなくほのぼのした風情で、」

「綾ちゃん、おはよう！」

「高杉さん、無事だったんですね！」

「心配したよ、綾っ」

「などと口々に言ってきた。」

「……さっきの剣呑さが嘘のよう。こういうとき、チカ 我が親

「友たる藤宮千景のパワーはすごいと思う。空気を読まない全力の善

「意の塊。なんでスパイなんかやってるんだろ。」

「と、そのとき。」

「高杉綾子さんですね」

「声をかけてきたのは、直接の面識はないけれども見覚えのある顔
「高杉綾子さんですね」
「声をかけてきたのは、直接の面識はないけれども見覚えのある顔
だった。」

（新人……じゃないわね）

保安課の制服を着ているし、だいたい歳がとても高い。たぶん支部長より上の世代の、いぶし銀のおじさんだ。ちよつとかっこいい。

「保安課長の片嶋かたしまです」

「お名前は存じております。例の事件ですか？」

「はい。」

詳しいお話を伺いたく思います。お手数ですが保安課の取り調べ室までお越しいただきたい」

「いま、すぐに？」

「こつというのは先延ばしにはいけません。」

不快な想定やもしれませんが、あなたが一時間後に死体で見つかる可能性もある。そうなつてからでは遅いのです」

「わかりました。では、このまま参りましょう」

不安そうにしているチカに大丈夫だよと目配せしながら、ため息……どうも、めんどくさい一日になりそうだった。

「どうということですか？」

どん、と強く机をたたく音。

思わず片嶋のほうを見ると、彼もこちらに顔を向けていた。

保安課の取り調べ室の目の前。入ろうとした途端、そんな声がしたのだった。

「……どうということなんでしょうね」

「あなたに問いかけたわけではないと思いますが」

「冗談です。で、なんですか。あれ」

「今朝方から我々が取り調べていた方です。我々の調査に大変な不快感を覚えたようでした、先ほどからあやつて抗議なさつておられるのです」

「……あらら」

まあ、気持ちはわからなくもないけど。

「ですがあなたには関係のないこと。どうぞ無視してお入りくださ

「い」

「無視……ねえ」

できそうにないなあ、と思いつつも、一応言われるままに入る。殺風景な部屋。机は一個しかなく、それを挟んでいくつか椅子が置いてある。そういえば、施設の視聴覚室で見たドラマの取り調べ室ってこんな感じだった。

そして、奥のほうの椅子にそいつは座って　いや。立って激昂していた。

「勝手にひとを人殺し扱いしておいて、か、かんちが良かった!? ふざけるのもいいかげんにしてくださいっ」

「申しわけありません。ですが、これも職務で　」

「職務だったら、なおさらかんちがいで済むはずがないでしょうっ」
「……うっうっ」

反対側に座っている若い保安課員が言葉に詰まる。　未熟だな

あ。上司に責任押しつけて逃げればいいのに。

と、考えていると片嶋が動いた。

「小辻^{こつじ}くん。保安課長の片嶋です」

おお、立派。自分から責任を被る気だ。

……まあ、それじゃ都合悪いんだけど。時間かかると面倒だし。というわけでそろそろ介入しよう。

「あ、あなたがっ……え？」

すい、と身体を割り込ませる。

「小辻^{こつじ}くんと言ったわね。高杉綾子よ。よろしく」

「あ、え　？」

展開にとまどったんだろう。相手がうるたえる。

「あ、説明がいるかな。あなたが殺したことになるって相手なんだけど」

「あ、えつと、はい。それは聞きましたけど……」

顔を傾けてちょっと影を作り、憂い顔モード。がんばれわたし、ここが正念場だ。

「迷惑かけてごめんなさい。もう少しわたしが早く来れば、あなたがこんな目に逢わなくても済んだというのにね」

「め、めめ迷惑なんてそんな!」

よし成功。こつそりガッツポーズ取りながら、わたしは片嶋のほうを向いた。

「片嶋さん。このひとの尋問はもう済んだのでしょうか?」

「ええ。まあそうですね」

「なら、いつまでもこんなところにいるべきじゃないわ。オフィスに行つて、同僚のみんなに顔を見せにいったらどうかしら」

「は、はいっ」

相手はなんだかぎくしゃくした動きで、それでも駆け出すような速度でドアへ向かった。

「オフィスのみんなによろしくね」

「はい!」

ばたん。たつたつたつた……

「ふ……ちよろいわ」

「女は魔物 ですね」

「どうも。褒め言葉と受け取っていいんですよ?」

「あなたの解釈には干渉しません」

むむ、こつちはなかなか手ごわい。やるなおじさん。

「まあ、相手も魔物でしたし。この場合のたとえとしては不当かもしれませんけどね」

「おや、気づかれましたか」

「慣れてますから」

「なるほど。あなたの経歴からすれば、当然でしたな」

片嶋は納得したらしい。

ちなみにさつきから置いてけぼりの若い保安課員は、話についていけずぽかーんとしている。

……なんだか居心地が悪くなって、わたしはさつきの彼がいた場所にさつきと座った。

「さ、始めましょう。面倒なことは早く終わらせたいから」

尋問はあっさり終わった。

……いや、まあ被害者だし、生きてたんだから事件なんてあつてないようなもので、当然と言えば当然なんだけど。

とりあえず椎堂にした報告と、「相手はこちらを殺したと思い込んで去っていったんじゃないか」という予測を述べておいた。実際、その程度しかわたしが生きてる理由は思いつかない。

オフィスに帰ってくると、なんだか不穏な空気が流れていた。

「あれ、どうしたの？」

こっそりチカに問うと、彼女は特定の人物を目で指しながら、

「いやー、その……さっき彼が来たとき、みんなで『あいつが犯人だ』的な扱いをしちゃって。

それで、なんだか気まずいんだよね」

「あー、そういうこと」

というか、チカが気まずいって言うのなら相当だろう。

「今日、彼の仕事は？」

「ないよー」。

ほら、綾ちゃんだって最初の日は横浜めぐりだったでしょ？」

「あー、そっか。そういうイベントがあったんだっけ」

納得。新人はまずこの横浜の特異な地勢を知ることから始める、というのが情報課の習わしなのだ。

「で、誰が案内するの」

「決まってるじゃないけど、誰だって無理だろう」

だって話しかけるとぎろってにらむんだよ、あの子

「はあ。そういう話か」

なら、卿かわたしってわけね」

「あ、そっか。そのふたりは遅刻してきたから無罪だよね」

……さすがにアレと一緒にくたにはしないほしい。あと微妙にピ

ントがずれてる。

「けどわたしに頼りきりつてのもアレだし……」

チカ、急ぎの仕事ある？」

「ないけど。え、どうして？」

「んー。いや、ちよっとね。」

わたしもいまは手空きに近いし、飛び出ていったばかりいつも暇してる連中は巻き込むとして

「う。なんか綾ちゃんか企みモードに入ってるよー。」

なに、どんなこと考えてるの？」

「人聞き悪いなあ。ちよっとしたことよ」

にやり、と笑ってわたしは言った。

後になって思う。この時点でわたしが普段の推論能力を維持していたら、あるいは事件はどんな推移をしたのだろう、と。

たぶん、そんなに大きくは変わらなかったんじゃないかな、と思う。考えれば考えるほど、この事件は最初っから八方手詰まりだった。最善を選べたとは思いたくないけど、たぶんそれほど状況を好転させることはできなかった、と思う。

……ま、いずれにしても。

わたしはこのとき、当然気づいているべき犯人を見逃していて、疑ってすらいなかった。そして、犯人がどうしてわたしが生きているのか首をひねっていたまさにそのころ、わたし自身は急速に死につつあったのだった。

N
e
x
t
,
b
l
u
e
s
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4244ba/>

亡霊と不死者の時間

2012年1月15日00時48分発行